

松

(能)

ツレ 高橋 憲正
シテ 高橋 右任

風
ワキ 北島 公之

間 若生 敏郎

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 住駒 俊介

笛 江野 泉

後見 佐野 由於
佐野 弘宜

地謡

山本 貢伸 渡邊 茂人
酒井 章 藪 俊彦
木谷 哲也 島村 明宏
田屋 邦夫 佐野 玄宜

休憩 二十分

実盛

(仕舞)

キリ 広島 克栄

地謡

藪 克徳
渡邊 荀之助
渡邊 茂人
木谷 哲也

文相撲

(狂言)

大名 炭 哲男

太郎冠者 炭 光太郎
新参の者 中尾 史生

後見 清水 宗治

(能)

ツレ 松本 博
シテ 福岡 聡子

絹
ワキ 苗加登久治

間 能村 祐丞

大鼓 田中 一義 太鼓 徳田 宗久
小鼓 河原 清 笛 室石 和夫

卷

後見 佐野 玄宜
松田 若子

地謡

水口 純治 藪 克徳
谷 清士 渡邊 荀之助
長野 裕 広島 克栄
山崎 健 佐野 弘宜

能松風 (まつかぜ)

西国行脚を志す諸国一見の僧(ワキ)が津の国須磨の浦に着き、由緒ありげな磯辺の松を松風・村雨の旧跡と聞いて、経念仏するうちに日が暮れたので、海士の塩屋に宿を借りようとしています。そこへ水桶を持ち汐汲み車を引く女が二人(シテ・ツレ)現れて、憂き世の業を嘆くかと思えば仕事歌にも興じ、桶の水に映る月を数えながら塩屋に帰ってきます。僧は宿を借りることを許されて、この浦でわび住まいをした在原行平の歌を詠じ、松風・村雨の旧跡に語り及ぶと、二人は懐旧の涙を流し、自らをその姉妹の幽霊と打ち明けて、罪深い恋の妄執を弔うよう僧に頼みます。思い出した慕情には火がついて狂気に至るのを常とするらしく、松風が形見の立烏帽子・狩衣を身にまとう頃から松が行平に見え始め、やがて村雨も幻想を共にして、「今帰り来ん」恋人を待ちます。待ち続けて舞う松風の妄執が激しい波風にあおられる一夜、僧には回向を待つとも聞こえて、夢は跡なく覚めます。

狂言 文相撲 (ふみずもう)

奉公人が一人しかいない自称大名が新参者を抱えようとしています。太郎冠者が街道で拾って来た新参者は弓・鞠・包丁・碁・双六、馬の臥せ起こしと万能に達する由。なかでも相撲を得手とすると聞いて、大名は自分で相手をします。目隠しの手を食らって目を回した大名は、伯父から贈られた相撲の本を見て手を確かめ、二度目は拳で張って勝ちますが、三度目には取り組み最中、相撲の本を見て倒されます。その腹いせに何をするでしょう。

能卷 絹 (まきぎぬ)

今の天皇の霊夢により千足の巻絹を三熊野の神前に奉納することになりました。臣下(ワキ)は国々から巻絹を集めますが、都からの分の到着が遅れています。それを運ぶ人夫(ツレ)は旅路を急ぎながら、本宮手前の音無天神に立ち寄り、冬梅を見て一首の和歌を手向けた分、遅参しました。それを咎めて臣下が人夫を縛め、罪の報いを思い知らせます。その時、どこからともなく巫女(シテ)が現れ、音無天神を名乗って、和歌を手向けた者ゆえにすぐに縄を解くよう求めます。神慮に偽りのない証拠に、巫女は人夫に上の句を詠ませ、自分は下の句を付けて、臣下の疑いを解くと共に人夫の縄も解いてやります。和歌は本朝の陀羅尼、仏神も親しむその徳を称えて舞う巫女は、臣下の求めにより幣を取り持ち祝詞を上げて、さらに神楽を舞ううちに物に狂って神語りします。仏法守護の熊野全山、諸神が巫女に取り憑いて身の毛もよだつ狂乱の果てに、神はあがり巫女も本性に戻ります。

(金沢大学人間社会学域教授 西村 聡)

次月の予定 平成三十一年十二月一日(日)午後一時始

(能) 芭蕉 (狂言) 鐘の音 (能) 飛雲